

P-8-65

子癇発作を除外し経陰分娩に至ったけいれん合併妊娠の1例

熊本赤十字病院 産婦人科

○^{やました}山下 ちひろ、三好 潤也、村上 望美、宮崎 聖子、堀 新平、井手上隆史、荒金 太、福松 之敦

【緒言】妊産婦のわが国の全国周産期施設を対象にした調査によると2007年における妊娠に関連した脳血管障害は184例であった。その内訳は、出血性脳卒中57例、虚血性脳卒中30例、子癇および高血圧性脳症82例、その他15例であった。当院で経験した妊産婦の意識障害の症例は、2016年1月～2018年12月の2年間で8例であり、内訳はくも膜下出血1例、脳梗塞1例、子癇3例、その他3例であった。そのうち、痙攣発作を伴って搬送されたのち、臨床的に子癇を除外できたことで自然経陰分娩に至った1例を報告する。【症例】37歳、初産婦、帰省分娩のため近医産婦人科で妊娠管理を受けていた。妊娠38週に自宅で痙攣が重積し、当院救命救急センターに搬送された。搬入時痙攣は持続しており、血圧160/90mmHgであった。ジアゼパム静注により痙攣は消失し、血圧も正常化した。病歴聴取により、左側頭葉でんかんで治療歴があり、抗てんかん薬を服用していることが判明した。経過観察目的に入院とし、子癇発作あるいはてんかん発作の可能性を考え、抗てんかん薬と硫酸マグネシウムを併用した。頭部CTを撮像し、脳浮腫や出血などの明らかな異常がないことを確認した。血液検査でも肝腎機能障害を認めず、子癇は否定的と判断した。胎児心拍数陣痛図(CTG)では基線細変動が減少していた。入院後、高血圧は認めず、CTG所見は改善した。1分ほどの痙攣を2回繰り返したため、抗てんかん薬を増量の上、入院4日目に退院とした。その後、かかりつけ産婦人科で自然経陰分娩となった。【結語】妊婦の痙攣・意識障害では可能な限り患者情報を入手し適切に鑑別診断することができれば、自然経陰分娩が可能となる。

P-8-67

当院救急外来における整形外科的外傷の見逃し症例について

伊勢赤十字病院 ローテート

○^{なかた}中田 ^{けんた}健太、川口 航希、伊東 直也、加藤 祥、奥野 一真、西本 和人、森川 丞二、榊原 紀彦、山川 徹

【目的】救急外来においては、様々な症状の患者が受診するため、見逃しは起こりうる問題である。当院は3次救急病院であるが、軽傷のウォークインから重症のドクターヘリでの搬送の患者まで受け入れている。まず研修医・外科系救急担当医が診察し、整形外科の診察・処置必要と判断されると、当科にコンサルトとなる。今回わかれしたのは、当科で経験した整形外科にコンサルトされずに外傷を見逃された症例を検討したので報告する。【方法】2017年以降で、救急外来で当日当科にコンサルトなく見逃され、後日当科にコンサルトとなった症例を検討した。【結果】渉猟しえる限りでは、大腿骨近位部骨折が4例、脊椎椎体骨折が2例、上肢骨折が3例、長母指伸筋腱断裂が1例、右足第2指DIP開放性脱臼が1例であった。全例当科全体で検討し、適切な手術や処置などがとられていた。【考察】当院救急外来は1日平均50～60人、年間では17000人以上の患者、年間約10000台の救急車、約250回のドクターヘリ搬送を受け入れている。そのうち整形外科疾患は2400人程度と推定されている。諸家の報告では1～2%の見逃し症例があるとされている。当院でも年間40人程度の見逃し症例があるものと思われる。当院での対策としては受診された患者に、説明用紙を渡し、見逃す可能性があり、必要あれば当院もしくは地域医療機関受診をすすめている。地域医療機関からの連絡で見逃しが判明した症例もあり、地域医療連携を強化する必要がある。【結語】当院救急外来における整形外科的外傷の見逃し症例を検討した。見逃しは起こりうるものとして診療する必要があり、判明した場合はしっかり対処する必要があり、患者への説明、地域医療連携が重要である。

P-8-69

当院で治療したAPAMの6例

熊本赤十字病院 産婦人科

○^{やまと}山元 ^{やすひろ}寛寛、井手上隆史、村上 望美、宮崎 聖子、三好 潤也、荒金 太、福松 之敦

【目的】子宮ポリープ状異型筋腺腫(APAM: atypical polypoid adenomyoma)は比較的稀な子宮内腔に発生する広基性のポリープ状腫瘍である。今回我々はAPAMと診断された症例について経過と治療について検討したので報告する。【方法】当院で2009年から2018年の間で病理学的にAPAMと診断された6症例について後方視的に検討した。【結果】平均年齢は43.3歳(37-48歳)で妊娠歴があるのは1例であった。主訴として不正性器出血や過多月経を4例までに認めた。検診で頸管ポリープと子宮内腫瘍を指摘された例が1例あった。術前に組織診を施行した2例でAPAMが指摘された。術前MRIを施行した5例での術前診断は子宮筋腫が4例、子宮体癌が1例であった。TCR、ポリペクトミーは全例で施行しており、病理組織学的にAPAMと診断した。高分化型類内膜腺癌との合併を認めた例が1例で、APAM of low malignant potentialを指摘された例が1例あった。この2例を含めた3例ではAPAM診断後に子宮摘出した。他の1例は経過観察の方針となったが、TCR後4か月の内膜組織診でG1の類内膜腺癌を認め、子宮摘出を施行した4例で再発は認めない。【考察】上皮性・間葉性混合腫瘍に属する良性疾患とされているが、高分化型類内膜腺癌との鑑別が必要な場合があり、また合併も知られている。APAMの高分化型類内膜腺癌との合併率はこれまで8.8-17.2%と報告されているが、当院の悪性腫瘍の合併率は66.7%と高率であった。APAMから離れた位置に類内膜腺癌が合併することもあり、TCRでの保存的治療を選択する場合は、悪性腫瘍の合併に留意した上で経過観察が必要である。

P-8-66

DLBCL治療中に合併した巨大DVTの1例

深谷赤十字病院 研修医

○^{すがわら}菅原 ^{ようへい}洋平、金 佳虎、田口 哲也

【背景】急性期の腸骨大腿静脈領域の広範型DVTに対しては、抗凝固療法に加えカテーテルを用いてより高濃度の血栓溶解薬を血栓に直接投与することを可能としたカテーテル血栓溶解療法(CDT)の有用性が示されている。当院でびまん性大細胞型B細胞リンパ腫(DLBCL)治療中に発症した左下肢DVTに対してCDTを行った症例について報告する。【症例】72歳 女性。【主訴】両側下肢浮腫。【病歴】両側の下肢浮腫を認めてDVT疑いで前医受診。CTでは下肢静脈血栓は認めず腹部傍大動脈から腸骨動脈にかけて巨大な腫瘍を認めた。画像上悪性リンパ腫が疑われ当院血液内科へ紹介となった。腫瘍を生検し病理でDLBCLの診断となった。入院後R-THP-COP療法(CHOP療法変法)による加療を開始した。2週間後右下肢浮腫は改善傾向にあったが左下肢浮腫増大を認めた。超音波検査上、下大静脈から左大腿静脈までの連続した血栓閉塞を認め当科紹介となった。翌日からアビキサパン10mg/日の内服を開始し、IVCフィルターを留置した。数日間経過をみたが左下肢の浮腫改善無いためEVT+CDTの方針とした。左膝窩静脈から造影すると左総大腿静脈に残存血栓があり左総腸骨静脈で閉塞していた。閉塞部にガイドワイヤーを通過させバルーンで拡張し血流を得た。その後Fountainカテーテルを留置しウロキナーゼ12万単位を静注した。その後6時間毎にウロキナーゼ6万単位を静注した。カテーテル留置2日後、左下肢静脈を造影すると総腸骨静脈に一部狭窄認めるものの良好な血流が得られたためカテーテル抜去とした。数日で左下肢の浮腫は改善しその後は下肢浮腫出現なくDLBCLの加療を継続されている。【考察】DOACの内服のみでは総腸骨静脈に血栓が残存しており、EVT+CDTを行うことでより有効に血栓を溶解できた。リンパ腫契機に腸骨大腿部領域の広範型DVTに対してEVT+CDTが有効であった1例を経験したため報告する。

P-8-68

後腹膜に発生したSolitary Fibrous Tumorの1例

熊本赤十字病院 診療部 研修医

○^{つちや}土屋 ^{かずし}一志、永末 裕友、日隈 大徳、木原 康宏、横溝 博

【症例】33歳女性。【現病歴】半年前より下腹部腫瘍を自覚し、近医産婦人科にて腹部エコーで充実性腫瘍を認め、当院に紹介となった。【検査所見】採血上、各種腫瘍マーカーはいずれも陰性であった(CEA: 0.3ng/mL, CA19-9: 33.1u/mL, CA125: 27.8u/mL)。CT、MRIにて骨盤内に最大径15cmの充実性腫瘍を認め、一部囊胞や壊死を伴っていた。周囲臓器と広く接しているが、明らかな連続性は認められず、由来不明の骨盤内腫瘍と考えられた。【鑑別診断】GISTや腸管から派生した腫瘍、リンパ腫、中皮腫などの疑いとなり、大きさより変性の可能性も否定できず、当科で手術加療の方針とした。【手術所見】下腹部正中切開で開腹したところ、腫瘍は膀胱腹膜の腹膜下に存在し、局在より後腹膜由来の腫瘍と考えられた。腫瘍は血流豊富で、内外腸骨動脈や下腹壁動脈からの流入血管を多数認めていた。ただし、腫瘍は比較的境界明瞭で、明らかな他臓器への浸潤所見は認めなかったため、腫瘍のみを摘出し手術を終了した。【経過】術後経過は良好で、術後7日で退院となった。術後12ヶ月の時点で再発を認めていない。【病理診断】腫瘍は径15cmで、被膜を有する充実性腫瘍であり、断面は陰性であった。病理所見では、異型に乏しい小型細胞が密に増生していた。免疫染色ではCD34のみ弱陽性で、最終病理診断は孤発性繊維腫(SFT: Solitary Fibrous Tumor)であった。SFTは比較的稀な腫瘍で、発症率は人口10万人に対して2.8人といわれ、好発年齢は60～70歳台、男女差はないとされている。多くは胸腺発生であるが、その他全身からの発生の報告がある。今回、われわれは若年女性の後腹膜に発生した稀なSFTの1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

P-8-70

体験型図書室オリエンテーションのアンケート結果からの検討

伊達赤十字病院 総務課

○^{おの}小野 ^{かのこ}佳代子

【はじめに】伊達赤十字病院では毎年4月に新入職員に向けて図書室のオリエンテーションを実施している。司書としての関りは、2012年に看護師教育担当者からの依頼で新人看護師図書室研修を実施したことからの始まりである。現在は看護師のみでなく全職員の新入職員に対して行っているがその紹介と、現状の評価に関し報告する。【方法・成果・課題】研修の内容は、図書室の紹介や業務内容と取組を知ること、利用法と的確な文献検索を身につけることを目的としてプログラムを組んだ。プログラム前半はデータベースを使っでの検索指導と図書室の利用について指導した。後半は図書室の作業体験を取入れ、外部からは仕事内容が分からないく図書室の仕事を経験してもらいその内容を理解し、利用の意識改善に繋げる目的で行った。オリエンテーション終了後に6つの項目についてアンケートを実施した。2016年度と2018年度のアンケートの結果や終了後の感想と比較し、成果と問題点から今後の課題を検討した。主な成果としては、利用者増と看護研究の支援及び利用の意識変化が見られた。また課題として指導内容の偏りと時間配分への工夫が必要と感じた。【まとめ】今回の検討から、オリエンテーションに必要なことは「楽しむ」「知識」「理解」の3点が重要であると考えた。オリエンテーションは個々の工夫や試みにより様々なかたちがある。利用者に、「楽しかった！また図書室にきたい」と思われる利用者教育をこれからも実現していきたい。